

第8回国際農村医学会議参加記録

越山 健二

第8回国際農村医学会議は、昭和56年9月14日から、同18日まで5日間、フランスのアビニョンの法王庁で行われた。日本からは、90名近くの参加があり、発表された演題も32に及んだ。演題の項目は、人間工学、中毒、寄生虫、栄養、生活と作業、医療、母子の7部門で76題の発表が2つの会場で行われた。今回は西欧諸国からの出席者が多く、日本からは、前回のソルトレークと同様、発表参加者共に多いのが特筆される。富山県農村医学研究会からは、豊田会長のほか、寺中城端厚生病院長と越山上市厚生病院長ほか2名が出席し、寺中、越山がそれぞれ本誌掲載の如き発表を行った。

会場となったアビニョン市は、南フランスのローヌ河畔にある人口10万足らずの小都市で、周囲が城壁で囲まれ、14世紀の法王庁が、城塞さながらに丘の上にそびえ立っている。この城塞のすぐ下が「輪になって踊ろう。」の歌詞で有名な「アビニョンの橋の上で」のサンベネセ橋で、ローヌ川の中流の処で破壊されたままになっており、多数の観光客で賑っていた。この宮殿と城塞を兼ねた14世紀のゴシック風の大建築物、法王庁が学会場となった建物である。(1309～1376年法王庁遷都の時代)

国際学会の施設としては、城塞で階段が多く、石造りで狭く、採光も不十分であるが、当番国のドブリゼイ会長の好意から出た選択によるものであろう。

9月13日夜成田をたち、同14日朝コペンハーゲンからパリを経由、正午すぎマルセユ

に到着、バスで2時間、アビニョンに到着。学会場で登録をすませた。9月15日から学会が始まり、9時から開会式が行われ、ドブリゼイ学会長の基調講演や各国の役員のコメントがあった。要旨は大体次の如きものであった。経済発展、人類の進歩発展の中で、自然破壊が先進国のみならず、世界的な規模で浸透しており、森林も50%破壊された。

生態系の再建が重要でWHOでもこれを提唱し努力を重ねている。農村に於ける農薬汚染から、水の汚染、空気の汚染は先進国のみならず第3世界にも及んでおり、1960年以降の日本の環境汚染も著明であると述べた。又第3世界では、今日なお結核や寄生虫が増加しており、生態系が衰えつつある。国際農村医学会は20年の蓄積をもとにして、この問題に積極的にとり組む必要があると述べた。その他チェコスロバキアのマツーフ会長は、主として労働問題を、英国のクナーベ氏は欧州部会の活動状況を説明し、農機具による障害や、健康教育の重要性を指摘、日本の若月国際学会事務局長は国際学会のこれまでの経過報告と共に、アジア部会の状況から特に第3世界の国々の活動が重要であり、地域住民の生活の中で学会の成果を役立たせる事が必要で、各会員は自国だけでなく近隣の国へと拡め、学問的な意見をとりかわし努力してゆく必要性を強調し、最後に次回の国際医学会議は、オーストラリア、ニュージーランドで開催すると述べた。午後から演題発表が行われ、noise 3題、Pesticides 8題の発表が行われた。翌16日は、Rural pathology, Epidemiology,

Living and working conditions. Nutrition の項目について29題の講演があり、17日は、Occupational pathology, Ergonomy, medical care, Aged people, mother and child, Spine and Work, Health Education の項目で36題、3日間で76題の発表が行われた。寺中は16日 epiderniology で、越山は17日 medical care の部門でそれぞれ発表を行った。講演後座長から謝辞とコメントがあり、質問も活発に行われた。日本から通訳者も同行しており、あらかじめ抄録も配布されていたので理解されたのではないかと考えている。そのほか学会が企画した行事では、16日午後よりアビニョン近郊で地中海に面した製塩工場 (Salins du Midi社) の見学と、17日夜、法王庁内大謁見室での夕食会であった。製塩工場は、地中海の海水を引き入れ、めぐまれた条件の中で製塩するもので、まさに一見に値するものであった。広大な土地は外部と「完全に隔離され、製塩と同時に自然公園として」多くの水鳥や動物が保護され、生息していて、極く限られた者にしか公開されない様であった。夕食会も盛大で、スポンサーと思われる数多くの仏国の農業団体の男女をまじえ、広々とした高いドームの中で仏国のワインやウィスキー、山海の珍味が次から次へと並べられ笛や太鼓、踊りなど、地方文化の伝

統的な芸術も披露された。このような企画も、国際農村医学会の一つのしきたりの行事のようになっていものでもあり、酔うほどに、喰うほどに、すべての学会人が手をつなぎ、片言で意見を交換するのであった。学術の研究も必要であるが、このようなアトラクションも又感慨深いものがあり、正に参加することに意義があると強く感じた事である。

学会終了後は、日本からの参加者それぞれ、A・B・Cの3班に分かれ、ヨーロッパ各地を視察したが、マルセイユ、トゥーロン、サントロペ、カンヌ、ニースは南フランスの有名な観光地でもあり、快適な気候と美しい山野と海岸に恵まれ、地中海に面し、歴史的にも、文化的にも蓄積されたものの多い処である。コートダジュールという言葉の通り、その風景は何時も何処かでみかけた処の様だが、それは多くの大芸術家の残した遺産と重なったものであり、明るい太陽のもとで抜ける様な空、家や木や、土の色が踊っているように思われた。

南仏からパリ、ベルリン、ストックホルム、コペンハーゲンを短時日で廻り、9月27日アンカレッジ経由で帰宅したが、豊田会長等は、ストックホルムで老人施設の見学をした。その視察記が本誌に掲載されている。